批評

『那珂通世遺書』を讀む

文學博士　桑原隲藏

一

この一年の間に世に公にされた東洋史に關係ある書類の中で、學界の注意に價するものは、僅に指を屈する程と思ふ。故那珂博士の遺書は勿論その尤も傑出したものである。博士が去る明治四十一年三月世を辭せられてから、早くも七八の星霜を經た。筐底の遺稿の一日も早く世に公にされんことを希望したものは、吾が輩一人ではあるまい。委員諸君の盡力によつて、その遺稿が昨秋八月に出版されることゝなつたのは、獨り故博士の爲めのみでなく、廣く我が學界の爲に祝すべき至りである。

一體那珂博士の學風は極めて堅實精緻で、一の曖昧一の糊塗を許さぬ。反覆考慮した結果でなければ、決して口にも筆にも發表せぬのである。故にその考證なり論斷なりは、多く永久的價値を有して居る。博士はまた博覽よりも精讀を尙ぶ方針を執つた。稀覯の祕書の搜索をも忽にはせぬが、較ろ在來の經史を通讀して、根柢を固めることに力を盡した。捷徑よりも大道に由るといふのが、博士の攻學の金科玉條であつた。從つて博士の學說には些個の誇衒の弊がなく、安心して信賴することが出來る。縱令その發表當時に、世間の視聽を動かす程の評判はなくとも、十年二十年と時を經る儘に、學界の稱讃が加つてくる。『那珂通世遺書』は勿論未定稿ではあるが、その未定稿の裡にも、十分故博士の學風が發露されて居つて、吾が輩をして轉た敬慶の念を禁じ能はざらしむるのである。

『那珂通世遺書』は全部千頁以上に涉る大著である。その卷首に揭げられてある、三宅（米吉）博士の編述された、文學博士那珂通世君傳は、實に筆情兼ね備る文章で、故博士の生涯を叙して殆ど遺

憾がない。さて那珂博士の遺書は大別して三部とすることが出來る。第一は『外交繹史』で、主として古代に於ける支那、朝鮮と我國との關係を研究したものである。第二は主として蒙古史に關係あるもので『校正增注元親征錄』と『成吉思汗實錄續篇』とがそれである。第三は前二者以外の雜錄である。以下各部に涉つて、少しく詳細に紹介せようと欲ふ。

二

（一）明治三十年以前に於ける那珂博士の研究題目は主として古代の日本と支那、朝鮮との關係であつた。この三國の關係は已に本居宣長や、伴信友以來幾多の學者も多少研究はして居るが、勿論博士のそれに比し得べきものは見當らぬ。

博士が三國の關係を攻究する當然の順序として第一に手を著けたのが『上世年紀考』である。『日本書紀』の年紀の實際より延長して居ることを論斷した考證で、『外交繹史』の卷之一に載せられて居る。『書紀』の年紀の延長せることは、已に本居宣長も公言して居る。また神武御即位の年を辛酉に擬定したのは、支那の緯書の說に本づき、信憑し難い次第は、石原正明も夙に論破して居る。（『大日本時代史』の久米博士の『日本古代史』に『書紀』の紀年の虛構は緯書に本づけることを最初に發見した人は、那珂博士なりとあるのは勿論事實を失して居る）併しそれらは多く斷片的のものであつた。那珂博士に至つて、始めて根本的に、將た組織的に、『書紀』の年紀の信用し難い事實を發表したのである。

博士は早く明治十一年一月の『淡々社談』第三十八號に『上古年代考』を寄せた相である。ついでそれを增補敷衍して『日本上古年代考』と題して、明治二十年九月の『文』に揭げ、更に修補を加へ『上世年紀考』と題して、明治三十年八月以後の『史學雜誌』に載せた。『外交繹史』の『上古年紀考』は即ちそれである。那珂博士が『日本上古年代考』を公にした後、星野博士、久米博士、吉田博士等各自の紀年私案を發表して居るが、那

珂博士のが矢張り尤も精確を覺える。

（二）『外交繹史』の卷之二は『朝鮮古史考』で明治二十七、八、九の三年に渉つて、『史學雜誌』に掲載したそれと全く同一のものである。朝鮮の史籍の今日に傳はれる中では、高麗の金富軾の『三國史記』が一番古いけれど、『三國史記』のみでは到底朝鮮上古の事蹟を明にすることが出來ぬ。那珂博士は日本、支那の古史に參考して、『朝鮮古史考』を著し、高句麗、百濟、新羅の三國の事蹟を始めその以前に當る朝鮮上古の眞相を闡明した。

この論文は二十余年前の起稿であるから、その後滿韓地方が、わが勢力範圍に歸すると共に、この方面の史蹟調査も實行され、又種々新い史料も世に現はれた今日では、その一局部に對しては、多少修正を要すべき點も出來た樣であるが、大體から見渡して、博士當年の論斷は今猶ほ確乎不拔と申して差支ない。

吾が輩は二十年前に『中等東洋史』を著はした時、朝鮮古代の事蹟は主としてこの『朝鮮古史考』を根據とした。今日でも吾が輩の朝鮮古代に關する智識はこの『朝鮮古史考』を基礎として居る。

『朝鮮古史考』の第八章は朝鮮樂浪、玄菟、帶方考で、漢代に朝鮮方面に建置した、所謂海東四郡の位置を考證したものである。この四郡殊に眞番郡の位置は、古來聚訟も雷ならざる有樣で、那珂博士の考證も最後の斷定を下すまでには到達して居らぬ。近時市村博士稻葉君山氏等は、那珂博士とは反對に、眞番郡を朝鮮の南方に擬定して居る最近に今西學士が發表した『眞番郡考』も亦南方說で、兎に角、南方說は旗色がよい。併し一方では白鳥博士、箭內、樋口二學士等は、那珂博士と同樣北方說を固執されて居る。両說の是非は更に今後の判定に待たねばならぬ。

（三）『外交繹史』の卷之三は『太古外交考』卷之四は『三韓朝貢志』で、雄略天皇御宇前後までの我が國と支那朝鮮との交渉の歷史である。多くは未定稿であるが、例によつて考證精確で、卓見も尠くない。その第二十七章は倭奴國王と題し、

主として『後漢書』の光武本紀及び東夷傳に見えた倭奴國のことを考證してある。倭奴國のことは支那の正史に見えたる我が國の最初の記事である上に、天明四年に出土した委奴國王の金印とも關係があるから、早く幾多の學者の研讀を促して居る。那珂博士は多くの先輩が、倭奴を怡土に擬するに反對して、落合直澄、三宅米吉二氏と同じくこれを倭の奴國と訓して、筑前の儺縣に擬定したこの擬定は鐵案であつて、吾が輩も全然之に同意を表する。

倭奴國の倭は那珂博士が『外交繹史』第二十六章の『山海經』『論衡』『漢書』の倭人の條に論せる如く、日本の總稱なることは無論であるが、たゞ『後漢書』東夷傳に

建武中元二年倭奴國奉貢朝賀(中略)倭國之極南界也

とある極南界の句に對する博士の十分なる解釋の見當らぬが多少遺憾である。この句に就いては古來の學者何れも解釋に苦んだ。星野博士は自說(倭を主として九州に當て、倭奴國を宗像郡の怡土鄕に當つ)成立の便宜から、この極南界を極北界の誤と認めて居る。三宅博士は倭奴國を正しく倭の奴國と訓したけれど、奴國は倭の西邊に當つて、南界でない故、こゝに極南界とあるのは、『後漢書』の作者の范曄が、その藍本ともいふべき『三國志』の魏志(正しくは『魏略』)の倭人傳に、倭の諸國を列擧した最後に、

次有奴國、此女王境界所盡、其南有狗奴國(中略)不屬女王

とある奴國を、倭奴國の奴國と混同して、極南界と誤記したものと認めて居る。

吾が輩は星野、三宅両博士とは所見を異にして極南界は極西界の誤と認める。西の字は古く鹵に作り、字形が南の字と混同し易い。清の何秋濤に據ると、『逸周書』の王會篇にある阼階之南、視淮氏榮氏次之、珪瓚次之皆西面の西面が一本には南面に作つてある。古書に西と南とを混同したことがわかる。極南界を極西界とすると、九州に在る

奴國が倭國即ち日本の西邊に在るから、何等牴牾する所がない。隨分岐路に入つたが、多少關係のあること故、こゝに附記して置く。

三

那珂博士はその晩年に渾身の精力を蒙古史の研究に傾注された。勿論博士が蒙古史の研究に着手したのは、可なり古いことゝ想像される。博士が明治二十三年十二月に刊行した『支那通史』卷四に、南宋末までの事蹟を編述したが、爾後久しくその續稿を公にせなんだのは、要するに蒙古の歴史を明にするには、是非廣く東西の材料を參考せなければならぬといふ關門に遭遇したからである故にこの時から蒙古史の研究は絶ねず博士の胸臆を占めて居つたに相違ない。元史列傳多闕漏（『那珂通世遺書』中に收む）の一篇は、明治二十六七年の作といふことだが、之を見ても博士が當時『元史』と『元朝祕史』『蒙古源流』と對校する外、早く Howorth（ホワオルス）の『蒙古史』などを參考したことが想像される。明治二十七八年の交、吾が輩が帝國大學在學の日、博士は已に高等師範學校に於て、蒙古史を講義して居つた。吾が輩は當時の高等師範在學の友人から、博士の講義筆記を借覽して、大なる稗益を得たことがある。重野博士が二十九年に發行した『支那疆域沿革圖』の元代圖（主として那珂博士の助力に由つたものと推せらる）また三十二年に第一高等學校で刊行した『元代疆域圖』（實は二十八年の作）等を見ても、蒙古史に關する博士の造詣の深いことが推測される。

併し博士が一身を蒙古史の研究に委ねることゝなつたのは、明治三十二三年以後のことである。陳毅や文廷式や、内藤博士や藤田（豐八）君など、内外の知人の厚意によつて、『皇元聖武親征錄』『元史譯文證補』『蒙文元朝祕史』等の要書が手に歸したことが、尠からず博士の蒙古史研究心を煽つたからである。

「元史」には蒙古開國の記事が頗る備はつて居らぬ。この缺陷を補ふには、支那方面の材料では、是非『皇元聖武親征錄』（或は單に『元親征錄』と

もいふ）と『元朝祕史』が必要史料となつて居る。『元親征錄』と『元朝祕史』との關係異同等は博士の『成吉思汗實錄』の序論に詳であるから、茲に述べる必要がない。

（一）『校正增注元親征錄』は即ち上記の『皇元聖武親征錄』の注釋である。『元親征錄』には已に清人何秋濤、李文田、沈曾植三氏が校注を施して居るが、足らざる所、誤れる所が甚だ多い。博士は之を補足した故、校正增注と題したことゝ推測される。この書は博士の未定稿ではあるが、『元親征錄』の注釋としては、殆ど完璧と評しても溢美でない。蒙古史研究者にとつて必讀の參考書である。

（二）『元朝祕史』に就いては、博士は已に『蒙文元朝祕史』を本として、有名な『成吉思汗實錄』を著はして居る。蒙古史研究に缺くべからざる二大史料とも、博士によつて十全に近い注釋を得た譯である。『成吉思汗實錄續編』は博士が『成吉思汗實錄』を著はした時の副產物ともいふべきもので、(a)太祖の功臣(b)太祖即位の後に見ねたる諸臣(c)『祕史』に見ねざる名臣の三項に分かれて居る各項ともに十分參考の價値があるが、中にも第三項の色目人の條が尤も興味が深い。是に由つて蒙古の祖宗が何如に廣く世界の人材を登庸したか、將た世界の人材が蒙古の建國に對して何如に大なる貢獻をなしたかゞ判然する。

『成吉思汗實錄續編』の十七頁に、博士はKingsai行在說を述べて居る。南宋の皇居杭州は中世の外國人間にKingsaiと呼ばれた。このKingsai.は京師King-Szeの音を訛つたものといふのが從來學界の定說であつた。那珂博士は南宋一代の間、杭州は行在と稱せられ、決して京師と呼ばれぬといふ事實を根據として、Kingsai.は行在（ヒンザイ）の轉訛であるといふ新說を唱へた。吾が輩は全然博士の新說に同意する。その理由は本年十月の『史學雜誌』の二三—二五頁に委細に述べて置いたから、重ねて茲に贅せぬ。

『成吉思汗實錄續編』の最後に附錄してある元代

の耶蘇（克里思惕）教徒、及び耶蘇教の東流に關する論文は、東洋史に志ある者の是非參考すべきものと思ふ。その論文中に、宋の姚寬の『西溪叢語』にある

貞觀五年、有傳法穆護何祿、將祆教詣闕聞奏、勅令長安崇化坊立祆寺、号大秦寺、又名波斯寺

といふ記事に就き、五年は九年、何祿は阿祿本の誤として、貞觀九年に長安に來た大秦の僧阿羅本とこの何祿とは畢竟同一人であると斷じて居る。吾が輩は直に之に贊成を表することを躊躇するが兎に角耳新しい說である。

四

『外交繹史』『校正增注元親征錄』及び『成吉思汗實錄續編』を除いた雜錄の中で、主要なるものは『東洋史學要書目錄』が第一で、『支那婦人纏足の起源』『支那正統論考』等の論文が之につぐ。『支那婦人纏足の起源』は一たび明治三十一年の『史學雜誌』に揭載して、纏足の起源を尤も精確に考證したもの、『支那正統論考』は支那に於ける正閏論の起源及び沿革を簡明に叙述して、明治三十年の『東亞學會雜誌』に揭載したものである。

さて『東洋史學要書目錄』は、或は時代（上古、漢魏等の如く）により、或は土地（安南、南海、印度、西域等の如く）により、或は部類（儒學、道教、佛教、財政、兵制等の如く）により、すべて四十五項目を立て、各項目に必要な參考書（漢籍）を列記したもので、東洋史を學ぶ者の爲には、好個の案內記ともいへる。歐米人の著書をも書き添へたら、一層便益多からんも、元來博士自身の座右に備へた私錄で、一般學者の爲に特に起稿したものでないから、かゝる注文は勿論無理である。學者はその必要に應じて、この東洋史學要書目錄と共に Cordier（コルディエ）の『支那書史』Bibliotheca Sinica を參考するより外ない。最近十年の間に、この目錄以外の新書も可なり世に出た。また博士は內閣所藏の書籍を記入してない樣であるから、この目錄を利用する人は、この邊の用意を忘れてはならぬ。

五

那珂博士と雖ども神でない以上過失は免れぬ。まして未定稿の遺書のこと故、多少不行屆のあるのは當然である。通讀の際心附いた、不行屆と思はれる二三の點を左に指摘して見たい。吾が輩は博士と直接師弟の間柄ではないが、絶ねずその指導を受け、また並々ならぬ知遇を受けた。併しこの私情の爲に曲庇阿附するが如きは、却つて博士に禮を缺く所以で、和而不同といふ主義は博士自身既にその上古年紀考の序論に宣言して居るではない歟。吾が輩が茲に博士の所說の足らざる所を指摘したとて、咎を泉下に得る譯があるまいと思ふ。

（一）『校正增注元親征錄』には處々に Raschid ud Din（ラシッド ウッディン）の Djami ut Tevarikh といふ書物を引いて、單に西史と稱してあるのは稍妥當でない。尤も博士はその三頁の注に

喇施特（ラシッド）蒙古史、後唯云西史

と斷りてあるけれど、單に西史とのみでは、Raschid の原書の意味に適せず、また歐洲の史籍の如く聞にて紛はしい。清の洪鈞の『元史譯文証補』に Raschid の書を單に西域史として引用して居るのも勿論贊成し難い。是非喇施特（ラシッド）史とか喇施特書とかあつて欲しい。二字名にするのが必要なら Djami ut Tevarikh (Collection d'Annales) の意味を採つて、集史とか全史とでも稱した方が妥當と思ふ。

（二）『校正增注元親征錄』中に洪鈞の『元史譯文証補』を引用した所が尠くないが、或は洪文卿曰とあつたり、（一頁）洪鈞氏譯文とあつたり、（五頁）また單に洪氏曰（七一頁）とあつて、劃一を缺き、讀者を惑はす恐ないでもない。名なり字なりに一定すべきものと思ふ。

（三）『校正增注元親征錄』一三七頁に、『元史』太祖本紀を引いて、壽六十六と記したのみで、成吉思汗の年壽の異說について、何等言及する所ないのは聊か物足らぬ心地がする。尤も博士は六〇頁の上春秋四十二とある本文の注に、喇施特を始

め、西域の所傳を對比してあるが、やゝ詳細を缺いて居る。博士の『成吉思汗實錄』三八頁に、帖木眞（チムン）誕生の條の注に、

この年は我が二條天皇應保二年壬午、宋の高宗紹興三十二年、金の世宗大定二年、西紀一一六二年なり

と明記してあるのを見ると、博士は蓋し『元親征錄』や『元史』に左袒して、六十六歳說を信じて居るものと認めねばならぬ。洪鈞の『元史譯文証補』卷一下に太祖年壽考異の一項を立てゝ異說を集錄してあるが、議論に徹底せぬ所がある。

Raschid に據ると（Erdmann（エルドマン）の Temudschin der Unerschütterliche 五七二頁附注三三に所引）成吉思汗は太陽曆にて滿七十二歳を終り、第七十三歳目に死んで、太陰曆にては滿七十四歳を終つて、第七十五歳目に死んだのである。太陽曆と太陰曆によつて年數に相違を生ずる理由は、イスラム敎徒の太陰曆は大（三十日）小（二十九日）の月各六、併せて十二月を一年として、閏月を置かずにたゞ約三年目毎に、一日の閏日を置くのである。即ちその一年は普通三百五十四日で閏年でも三百五十五日に過ぎぬ。一年三百六十五日强の太陽曆に比較すると、三年毎に一月餘、三十年毎に約一年の相違を生ずるからである。

尙ほ Raschid に據ると、成吉思汗の生れたのは回曆五四九年の第十一月（Dsul-ckadeh）で、その死は回曆六二四年の第九月（Ramadsan）に當る。この回曆を西洋曆及び支那曆に配當すると左の通りである。

回曆（太陰曆）	五四九年十一月	六二四年九月
西洋曆（太陽曆）	一一五五年（㊀）（㊁）月	一二二七年（㊀）（㊁）八月
支那曆	南宋高宗紹興廿四年（戊）十二月	理宗寶慶三年（㊀）（㊁）七月
		滿七十四年十ケ月 滿七十二年八ケ月

成吉思汗の死は、イスラム敎徒の所傳にては、回曆六二四年の第九月、支那の史料にては、南宋の寶慶三年七月となつて居つて、雙方全然一致する譯である。（日には少しく異同がある）

Raschid には成吉思汗の生れた日を缺いで居るが西曆十五世紀に出たイスラム敎徒の Mirchawend（ミルカヴェンド）

の歴史には、回暦五四九年十一月二十日の誕生となつて居る。即ち西暦にては一一五五年(乙亥)一月二十五日、支那暦にては紹興二十四年(甲戌)十二月二十一日に相當する。南宋の孟珙の『蒙韃備錄』に

今成吉思皇帝者、甲戌(紹興二十四年)生。彼俗初無庚申、今考據其言而書之、易於見彼歳也

とあるのと何等矛盾する所がない。紹興二十四年の十二月二十一日は、太陽暦では、次の年の一月二十五日に當るから、成吉思汗は乙亥の歳の誕生ともいふことが出來る。イスラム教徒の古き傳説に、成吉思汗は亥の年に生れて、亥の年に死んだとあるのは、事實と一致して居る。洪鈞が孟珙の記錄とイスラム教徒の所傳との間に、一年の相違があるものと信じて居るのは、粗忽千萬といはねばならぬ。

孟珙は成吉思汗と畧時代を同じくした人で、且つ尤も多く蒙古の有力者を接近した人である。その傳ふる所は頗る信憑するに足ると思ふ。從つて孟珙と全く一致するイスラム教徒の所傳を重んじて、吾が輩は成吉思汗の年壽を六十六歳とするよりも、七十四歳と信じたい。蓋世の大英雄の年壽のこと故、やゝ詳細に渉つて、茲に評論することにした。

(四)『成吉思汗實錄續編』一四二頁に

阿喇必亞人阿不賽篤の談に據れば、八七八年(僖宗の乾符五年)に澉浦即杭州の夥しき外國居留民の一部は克里思惕教徒なりと云へり。

とある澉浦は間違つて居る。アラブ人の原文にはKhanfouとあるから、正しくはカンフと譯した方がよい。那珂博士が、Khanfouの原文に澉浦の漢字を擬定したのは、勿論Klaproth以來Yuleや Richthofenなどの諸大家が、皆Khanfon澉浦同一説を採つたから、之に服從されたのであるが、吾が輩が近頃詳細に辯明しておいた通り、(大正四年十月の『史學雜誌』一二頁)Khanfouは廣府の音譯で瀛浦の音譯でない。故に澉浦(即杭州)とあるは較ろ廣府(即廣州)と改むべきである。

（五）『成吉思汗實錄續編』一四四頁に、唐の武宗の會昌五年の詔に、勒大秦穆護祓三千餘人還俗（『舊唐書』本紀）とある、祓の一字の解釋について博士は可なり困惑されて居る。或は唐の杜佑の『通典』に薩寶府祓祝とあるによつて、祓は祓祝ならんかとも考へ、また宋の志磐の『佛祖統記』に穆護火祆とあるによつて、火祆の脱落かども考へ、最後の斷定を躊躇して居る。併し『舊唐書』の穆護祓の祓は祆の誤である。宋の司馬光の『資治通鑑』には正しく穆護祆とあつて、元の胡三省は祆乎煙翻と注して居る。『通典』に薩寶府祓祝とあるのも、勿論祆祝の誤であることは、『舊唐書』職官志に、薩寶府の祆祝といふ官を擧げたるに據つて明白である。

（六）『成吉思汗實錄續編』一五〇頁にHoworthの『蒙古史』によつて、蒙古の都城喀喇和林（カラコルム）を訪ふたキリスト教僧嚕卜嚕克（ルブルク）（Rubruk）のことを記して

（前畧）此珍奇なる銀細工は、洪噶哩亞の別勒果囉篤（白城）にて捕はれたる、帕哩の銀工吉要姆（ギヨーム）寺舍の作にして、それを作るに銀三千馬兒克を費しき。この銀工の外に、嚕卜嚕克は喀喇科嚕姆にて、あまたの克哩思惕教徒・洪噶哩人・阿闌人・嚕思人・古兒只（勺兒只亞）人・阿兒篾尼亞人に遇ひき

とある洪噶哩亞はHungary、別勒果囉篤はBelgrade、帕哩はParisの充字（アテ）である。吉要姆寺舍は原文にWilliam Boucherとある。Williamを、フランス風に態々吉要姆（ギヨーム）と書き改めたのであるが、原文の儘にウイリアムとしても差支あるまい。あまたの克里思惕教徒・洪噶哩人・阿闌人云々とあるのは、原文のChristian, Hungarians Alans, Russians, Georgians, and Armeniansと對照すると、克里思（クリスト）惕教徒なる洪噶哩（ハンガリ）人・阿闌（アラン）人云々と譯する方がよい。

（七）那珂博士は外國の地名人名等に對して、必要以上に漢字を充てたがる習癖がある。『成吉思汗實錄』も同樣であるが、『校正增注元親征錄』にも

『成吉思汗實錄續編』にも盛にこの習癖を發揮して居る。人名では Yule に裕勒、Bretschneider にト咧惕旋（施？）乃迭兒、Pauthier に保提額、Ibn Khordâdbeh に伊本庫兒達特畢、Abul Feda に阿弗勒弗答、Plano Carpini に普剌諾喀兒闌尼を充つるなど一々列擧するに堪へぬ。地名國名等にもギリシヤに吉里沙、ローマに囉馬、ペルシアに珀兒沙、ビルマに必兒馬、Azerbaijan に阿特耳佩占 Mavar an Nahr に麻費闌那喝拉など、隨分目新しい漢字を充てゝある。

勿論博士の漢字を充てるには、嚴密なる法則があつて、その法則の要領を知れば、比較的正確（原音に近く）に發音出來る譯であるが、併し

(a)何如に密嚴なる法則を立てゝも、元來音を主とせぬ漢字を用ひて、外國音を表はす時は、必ず無理を生ずる。

(b)その當時の記錄に使用された、在來の漢字的固有名詞と、博士が自撰した漢字的固有名詞と混淆して、讀者に誤解を生ぜしむる恐がある。

(c)支那人相手の著述ならば兎に角、假名交り文の『成吉思汗實錄續編』に、此の如き書方を用ふるは無意味といはねばならぬ。

(d)同一の原名に對して、異つた漢字を充てる時は、讀者の疑惑を生じ易い。現にこの書中にも、同一の Raschid に對して、喇失惕、喇施特、拉施特と三樣の綴方が見ゐ、同一の Macoudi に對して馬蘇第又は馬速的と綴方を異にして居る。

此等の理由によつて、吾が輩は外國の地名人名等に一切（當時の記錄より傳襲せるものは別として）自撰の漢字を充てることを罷め、假名か又は洋字を使用するのを希望する。田中萃一郎君の譯した『ドーソン蒙古史』にも、洪鈞の『元史譯文證補』の用字を借り來つて、外國の地名人名等に漢字を充てゝあるが、決して贊成すべきことでないと思ふ。

（八）『東洋史學要書目錄』は曩に述べた通り、元博士の机上の備忘私錄に過ぎぬのであるから、之に十全を責むるのは勿論無理ではあるが、唯そ

の四六頁の佛教部第三類に、佛教東流に關する參考書類を收めた中に、『三國志』を脱漏して居るのは、可なり大なる手落であつて、或は印刷上の不行屆から起つたことかとも疑へる。申す迄もなく『三國志』の魏志に引いてある『魏略』の記事は、佛教東流に關する尤も正しき尤も古き傳說である。Chavannes（シャヴァン）はこの『魏略』の記事を佛譯して、一九〇五年發行の『通報』Toung Pao 誌上に揭載して居る。『魏略』の

昔漢哀帝元壽元年（西紀前二年）博士弟子景盧、受大月氏王使伊存、口受浮屠經、曰復立者其人也

の一節に就いては、Chavannes は唐の段成式の『酉陽雜俎』に漢所獲大月支復立經是也とあるを根據として、復立の義を解釋して居るが、唐の杜佑の『通典』に復豆とあるに由つて、復立は復豆の誤で、浮屠と同じく、Buddha の音譯と認める方が妥當であるまいか。

『東洋史學要書目錄』の類書類の中に『冊府元龜』を收めてあるが、此『冊府元龜』殊に其外臣部は支那と外國との交涉關係を調査するに必須の史料である。唐時代の外國關係を調査するには、『冊府元龜』を第一の史料と推しても、殆ど異議はあるまい。西域部や朔方部に『通典』や『通考』を擧げる以上、『冊府元龜』をも加へて置く方がよいかと思ふ。尤も『冊府元龜』の分類は混淆して居つて、實用に不便が多い。Chavannes（シャヴァンヌ）は嘗てその西突厥に關係ある部分を抽譯して、年代順に排列し、『西突厥志補』Notes additionelles sur les Tou-Kiue Occidentaux と題して、一九〇四年の『通報』に載せてある。同樣又は類似の方法によつて、各方面に涉つて、『冊府元龜』の內容を分類整理したら、必ず學界に多大の裨益を與へることゝ信ずる以上指摘はして見たが、所謂白玉の微瑕で、固より博士の遺書の價値に關係はない。吾が輩が彼是と論じ立てた主旨は畢竟備を賢者に求むるに外ならぬのである。

六

委員諸君が博士の遺書整理の爲に、多大の勞力

を費されたに對して、吾が輩は勿論十分の感謝を表せねばならぬ。が同時に多少注文したき點がないでもない。

（一）博士の遺書は未定稿であつて、誤脫の箇處多く、一々之を補正せんことは、固より不可能である。委員諸君が愼重の態度をとり、原形を存して敢て私意を加へぬは、至極賛成であるが、その誤脫の較然著明なるものは補正したといふに拘らず、當然の補正の加へられてない箇處が尠ない樣に見受けられる。姑く『東洋史學要書目錄』について申しても、『說文通檢』の撰者の姓名とか、『元典章』や『朔方備乘』の卷數とか、『史記』『漢書』の儒林傳の卷次などは、容易に補足される筈と思ふ。

（二）泰定帝即位の時の赦書は俗文體で、頗る面白きものであるが、博士は『成吉思汗實錄續編』一〇四頁に、此赦書を引用して、本文の側に、逐字巧妙なる訓讀を施して居る。併し肝心の反り點がない爲め、折角の訓讀も、多數の讀者には到底之を利用することが出來まい。是非反り點を添加することを希望する。反り點を施すのは、容易な事で、讀者は是に由つて多大の裨益を得る筈である。

（三）『外交繹史』といひ『校正增注元親征錄』といひ、また『成吉思汗實錄續編』といひ、中に內容が多く、貴重な記事が處々に散見するといふ有樣であるから、何れも索引があつて欲しい。索引がなくては、折角の遺書も十分利用する事が出來ぬ。索引を作ることは可なり面倒ではあるが、遺書の價値を十分に發揮するには是非必要の事と思ふ。

（四）この遺書は非賣品となつて居るが、書中に記載してある事項は廣き範圍に涉つて、東洋史專門以外の人々も亦之を參考する必要がある。現にこの書發刊後に、知名の學者でこの書の購讀希望を申出た人が尠くない樣である。學問の普及といふ點から見ても、那珂博士の功績を世に知らすといふ點から見ても、何とかして一般の希望者にも發賣する樣な方法を講じて貰ひたい。

內部の實情を悉さぬ放言かも知れぬが、吾が輩のこの注文が、幾分なりと委員諸君に採用されれば、誠に本懷の至りである。（大正四年十二月十日）